

平成22年5月31日現在

研究種目：基盤研究（B）（海外学術調査）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19401024  
 研究課題名（和文） 国際的視点から見た漢字文化圏における漢文訓読についての実証的研究  
 研究課題名（英文） Empirical research for the vernacular reading of Chinese texts in Sinosphere from the international point of view

研究代表者  
 小助川 貞次 (KOSUKEGAWA TEIJI)  
 富山大学・人文学部・教授  
 研究者番号：20201486

研究成果の概要（和文）：漢字文化圏における漢文訓読の全体像を解明するために、日本語、中国語、朝鮮語、ベトナム語による漢文訓読資料の学術調査を行なった。その結果、漢字文化圏における漢文訓読史モデルの構築、敦煌点本書目の作成、各国関係者との学術交流の三つの成果を得た。これによって漢文訓読史に関する国際的な研究基盤が確立したとともに、東アジア世界を理解する新しい視点を切り開いたことになり、今後の東アジア共同体構想にとっても大きな意義を有する。

研究成果の概要（英文）：In this research we have investigated glossed materials from Japanese, Chinese, Korean and Vietnamese in order to give the whole image of the vernacular reading of Chinese texts in Sinosphere. As a result we made hypothetical model for the history of vernacular reading of Chinese texts, descriptive catalogue of the Chinese manuscripts with reading marks and notes from Dunhuang and academic exchange relationship. That means the establishment of international research basement on vernacular reading of Chinese texts and the development of new perspective on understanding the world of East Asia, also is significant for the East Asian Community.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	4,800,000	1,440,000	6,240,000
2008年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
2009年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
総計	13,000,000	3,900,000	16,900,000

研究分野：人文学B

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：漢文訓読、漢字文化圏、東アジア世界、訓点資料、敦煌本、口訣資料、字喃資料

## 1. 研究開始当初の背景

## (1) 学術的背景

日本語以外の言語にも漢文訓読が存在することは、1960年代後半から知られていた

が、その詳細については一般にはもちろんのこと専門家の間でも十分には理解されて来なかった。これはひとつには、日本語以外の漢文訓読資料の所在、各資料の書誌情報や資

料的性格などの基礎的情報が極端に不足していたからである。例えば、敦煌資料を詳細な画像で公開している IDP (International Dunhuang Project) データベースにおいても、加点情報の記述はまったくない。もうひとつは、研究方法上の問題であり、なぜ各言語で訓読という手段を採用したのか、また実際にどのような手順で加点を行なったのかなど、訓読の本質に関わる問題が未解明であり、そのため漢字文化圏における漢文訓読の全体像が把握できていなかったからである。

## (2) 研究対象と研究組織

漢文訓読は漢字文化圏全体で行われていた言語活動であるが、これを一人の研究者が解明するには様々な点で困難が伴う。本研究は専門分野の異なる四人(日本語学、敦煌学、朝鮮語学、中国語学)が、それぞれの研究成果と海外学術調査の豊富な経験に基づいて学際的な研究組織を作り、この課題を乗り越えようとして企画されたものである。

## 2. 研究の目的

漢字文化圏における漢文訓読の全体像を解明するために、日本語資料(訓点資料)、中国語資料(大英図書館及びフランス国立図書館蔵敦煌本)、朝鮮語資料(韓国国内現存漢文文献)、ベトナム語資料(ベトナム社会科学院漢喃研究所蔵漢文文献)を対象とした海外学術調査を実施する。なお、資料のデジタル化保存が急速に進行する中で、今後、原資料の現地調査が急速に困難になることが予想される。本研究はそのための緊急な対応策であるとともに社会的要請に応えるものでもある。

## 3. 研究の方法

### (1) 各言語による漢文訓読資料の現地調査

#### ① 中国語資料の現地調査

フランス国立図書館所蔵敦煌本(ペリオ蒐集文献)及び大英図書館所蔵敦煌本(スタイン蒐集文献)を現地調査し、精密な書誌情報の収集と移点作業を行う。

#### ② 朝鮮語資料の現地調査

韓国国内所蔵の高麗時代を中心とする漢文文献の現地調査に加え日本国内及びフランス国内に現存する朝鮮本の現地調査を行う。

#### ③ ベトナム語資料の現地調査

ベトナム社会科学院漢喃研究所及び極東学院所蔵で現地調査を行い、漢文文献の概略的把握と加点資料の検索に努める。

#### ④ 日本国内外の日本語訓点資料の現地調査

日本国内に現存する訓点資料の現地調査に加え、国外(台湾)に現存する日本語訓点資料についても現地調査を行い、精密な書誌情報の収集と移点作業を行う。

### (2) 調査資料の整理

調査・移点した資料のデジタル化(スキャ

ニング)と目録化を行い、共有知財とする。

### (3) 国内及び国際学会で研究成果の報告

国内では訓点語学会、海外では韓国口訣学会等の国際学会で研究成果を報告し、漢字文化圏における漢文訓読について国際的理解の形成を図る。

## 4. 研究成果

### (1) 漢字文化圏における漢文訓読史モデル

漢文訓読が観察できる言語は、日本語、朝鮮語、中国語、ベトナム語、ウイグル語であり、ウイグル語を除く四言語には具体的な加点資料が残されている。これらの資料には、原漢文に対する加点、加点の形態上・機能上の類似性という二つの共通点がある。

原漢文に対する加点は、原漢文に強く依存する方法であり、原文から独立して存在する翻訳や複数言語を併記する対訳とは根本的に異なっている。なぜ原漢文に直接加点する方法を採用したのかという点については、第一に、中国文化(漢字文化)が到来した当時、周辺諸国では自言語を表記する文字体系が存在せず、外国文化としてそのまま受容するしかなかったのではないかと考えられる。第二に、漢籍を所管するのは律令制度のもとで運営されていた大学寮であり、教科やテキストの種類だけではなく、学習方法、履修方法、試験方法に至るまで細かく規定されていて、テキストを離れた翻訳が入り込む余地などなかったのではないかと考えられる。また仏典の場合も大蔵経というテキスト群が体系的に確立されており、漢籍の場合と同様にそのまま受容するしかなかったのではないかと考えられる。第三に、中国語は文法的関係が語順で示される孤立語であるのに対して、日本語や朝鮮語は形態素を付着させる膠着語である。原漢文を離れて翻訳すると付加要素は当然多くなる。それよりも原漢文をそのまま残しながら、原漢文にはない要素だけを付加させる方がはるかに効率的だったのではないかと考えられる(ベトナム語は中国語と同じ孤立語であるが、原漢文に直接加点するという点は共通している)。つまり、訓読は「孤立語 → 膠着語」という方向だったからこそ発生・展開した現象であり、その逆では起こらなかったのではないかと考えられる(図1)。



図1 言語類型と訓読加点の関係

加点の類似性については、それぞれの言語による加点資料を詳細に観察すると、個別言語・自言語を超越する符号（レベルA）と、個別言語・自言語に強く寄りかかる符号（レベルB）がある。さらに加点以前に、そもそもテキストの入手やテキストを読むための学習環境の整備（対校本・音義・辞書・注釈者等）という段階（レベル0）も想定しなければならない。実際の訓読・加点のプロセスはこのようなレベル0からレベルBへと展開していたことが予想される（図2）。

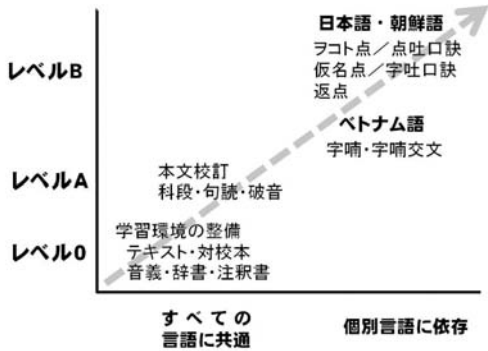


図2 加点の類似性と訓読加点のプロセス

見方を変えれば、レベルAは外国語としての基礎的共通な学習段階、レベルBは個別言語による発展的学習段階と考えることができる。ベトナム語資料では、字喃がレベルBに該当するが、ヲコト点や点吐口訣、返点に該当する符号は発見できない。これはベトナム語が中国語と同じ孤立語であって語順もよく似ていることが要因と考えられる。

加点の類似性に関しては、そもそも漢文訓読の原初形態がどのようなものであったか、また訓読・訓点は各言語が互いに関係なく独自に発生したものなのか、それともどこかに発生の起源があるのか、ということが問題となる。この点に関しては仏典であるか漢籍であるかという違いが大きく影響している。すなわち仏典の場合は「中国 → 朝鮮半島 → 日本」という考え方でほぼ一致しているが、漢籍の場合はこれとは別に「中国 → 日本」という直接的な影響関係も考えられるし、さらに複線的な考え方も必要であろう（図3）。

このことは、漢文の内容が仏典、漢籍、国書のいずれであっても、また使用する言語がいずれであっても、漢文訓読とは結局、古典的テキストに対する理解言語・解釈言語であるということを考えれば理解しやすい。

時期	朝鮮半島	日本		中国(敦煌)	周辺諸国
		仏典の世界	漢籍の世界		
6	三国時代 訓読(釈読)の発生				
7	統一新羅(676~935) 義湘(625-702)による華嚴経講義			破音点の発生 敦煌加点本 ・科段 ・句読 ・破音(声点) ・注釈書利用	高昌国 訓読の記事(北史高昌)
8	薛聡による訓読 (三国史記48、三国遺事4)	プレ・加点資料(角筆) ・奈良朝写経 ・判比量論(大谷大学) 南都華嚴で発生(朱・白) ・華嚴判定記(大東急) ・華嚴文義要決(焼失) ・華嚴経巻第17(京博)	現存しない	声点への展開 吐蕃による支配(781~)	
9		展開期の仏書訓点資料 天台宗で展開 第五群点・省画仮名	訓読の記録資料あり プレ・加点資料 ・宇多天皇宸翰周易抄		
10	高麗時代(918~1392) ・晋本華嚴経(角筆)		現存の加点資料登場 ・古文尚書(東洋文庫他) ・毛詩卷第六(東洋文庫) ・春秋経伝集解(有鄰館) ・漢書楊雄伝(上野家) ・世説新書卷第六(京博他)	影響?	
11	・瑜伽師地論(角筆) ・大方広仏華嚴経(角筆) ・周本華嚴経(角筆)		発展期の漢籍訓点資料		影響?
12	・旧訳仁王経(墨書資料) 訓読(釈読)の発達	平安時代4000点現存(築島)	平安・鎌倉時代200点現存		
13					ベトナム李王朝期 ・碑文の字喃 ・嶺南披怪

図3 訓読の起源と展開 (推定図)

以上、述べた東アジア漢字文化圏における漢文訓読という現象をコンピュータにおけるOS (Operating System) に譬えるならば、図4のようになる。

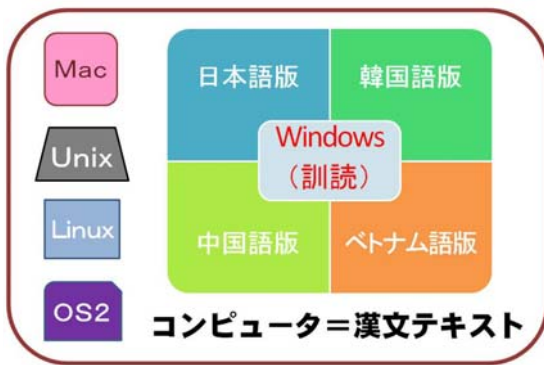


図4 漢字文化圏における漢文訓読を理解するための模式図

## (2) 敦煌点本書目

敦煌文献については、現在 IDP による画像データベースの公開が進んでいるが、加标点本について公開されている画像は少なく（特にペリオ蒐集文献については公開されていない）、書誌情報にいたっては極めて簡略であり、漢文訓読史研究の観点からは十分な利用ができない。このような現状に鑑み、石塚晴通による 40 年来の調査・移点資料及び本研究課題による調査・移点資料に基づいて敦煌点本書目を作成した。書誌項目は 9 項目とし記述言語は英語とするが、奥書に関しては原文（漢文）も併記する（石塚晴通・小助川貞次『敦煌点本書目』の構想」（第 101 回訓読語学会研究発表会、2009 年 10 月 18 日）参照）。

- ①資料番号 (S. xxxx P. xxxx)
- ②資料名及び調査時期
- ③法量
- ④書写・加标点年代
- ⑤料紙
- ⑥蔵書印
- ⑦加标点
- ⑧表紙
- ⑨奥書

点本書目の元データには、デジタル処理された移点資料（スタイン蒐集文献 61 点、ペリオ蒐集文献 117 点）を含むが、すべてのユーザに「公開・共有」するのは、上記 9 項目の書誌情報とし（近日中に IDP 画像データベースの書誌項目として公開する予定）、デジタル処理された移点資料部分については当面「非公開・共有」として特定ユーザと共有する方針を採る。IDP では、2015 年までにコレクションの 90%を誰でもオンラインで利用できることを目指しており、今後 IDP と連携協

力しながら中・長期的な研究（移点作業と書誌記述）を継続する必要がある。

## (3) 学術交流

前記の(1)(2)の成果を得る過程で、各国関係者と情報交換・学術交流を行い、本研究課題終了後も継続できる国際的協力関係を構築した。

- ①韓国：韓国国内での実地調査、口訣学会、韓日国際ワークショップ、国際学術会議への参加とともに、招聘及び来日中の韓国側研究者と京都国立博物館、京都大学、大谷大学附属図書館、東京国立博物館、大東急記念文庫、国立公文書館において共同調査を行い、漢文古写本・漢文訓読に関する学術交流を行った（2007-2009 年度）。
- ②イギリス・フランス：大英図書館及びフランス国立図書館で敦煌文献の実地調査を行うとともに（2007-2009 年度）、両機関から敦煌文献の専門家を「漢文古写本比較研究プログラム」（2008 年度）に招き、京都国立博物館、高山寺、龍谷大学古典籍デジタルアーカイブ研究センター、奈良国立博物館、正倉院において共同調査を行い、漢文古写本・漢文訓読に関する学術交流を行った（2007・2008 年度）。
- ③ベトナム：ベトナム社会科学院漢喃研究所及びハノイ極東学院において実地調査を行い、漢文古写本・漢文訓読に関する学術交流を行った（2007・2008 年度）。
- ④台湾：国家図書館で実地調査を行うとともに、台湾大学関係者及び致理技術学院関係者と漢文古写本・漢文訓読に関する学術交流を行った（2008 年度）。

## (4) 研究成果の位置づけと今後の展望

以上の研究成果によって、漢文訓読史に関する国際的な研究基盤が確立し、今後も引き続き連携・協力して調査研究ができる態勢が整ったことになる。また日本国内の学校教育（例えば高等学校の必修科目「国語総合」）においても、漢文訓読に対する国際的な視点に配慮する必要に迫られることになり、日本文化及び周辺諸国の文化理解に及ぼす影響は非常に大きい。西嶋定生はかつて東アジア世界を構成する指標として、漢字文化、儒教、律令制、仏教の四つを掲げ、他の三つを支えるものとして漢字文化に高い価値を付与したが（『中国古代国家と東アジア世界』、東京大学出版会 1983 年）、この漢字文化を受容する具体的な仕組みとして漢文訓読が共通に存在したことは、東アジア世界を理解する新しい視点を切り開いたことになり、今後の東アジア共同体構想にとっても大きな意義を有する。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 14 件)

- ① 小助川貞次、デジタル化時代に対応した漢文訓読研究の社会的共有システムの構築、『富山大学人文学部紀要』、査読無、第 52 号、2010、87-101  
<http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/kenkyu/k iyo52.mht>
- ② 小助川貞次、漢字字体から見た論語古写本の位置、月本雅幸・藤井俊博・肥爪周二編『古典語研究の焦点』(武蔵野書院)、査読無、2010、523-543
- ③ 小助川貞次、東アジア学術交流史としての漢文訓読、『富山大学人文学部紀要』、査読無、第 51 号、2009、33-44  
<http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/kenkyu/k iyo51.mht>
- ④ 小助川貞次、敦煌加点本を巡る研究課題、『富山大学人文学部紀要』、査読無、第 49 号、2008、99-111  
<http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/kenkyu/k iyo49.mht>
- ⑤ 小助川貞次、日本語訓点資料における破音の意義、『口訣研究』、査読有(依頼)、第 20 輯、2008、71-92  
<http://www.kugyol.or.kr/>
- ⑥ 小助川貞次、訓点資料の展開史における有鄰館蔵『春秋経伝集解巻第二』の位置、『日本語の研究』、査読有(依頼)、第 4 巻第 1 号、2008、15-30
- ⑦ 石塚晴通、十七条憲法一日本人の常識・道徳一、『日本学研究前沿文存』(華東理工大学出版社)、査読有、2009、670-678
- ⑧ 石塚晴通・大槻信、金剛頂大教王経頼尊永承点积文稿、『勸修寺論輯』、査読無、第 5 号、2009、1-48
- ⑨ 石塚晴通、「神護寺聖教目録」の内第 14 箱・第 35 箱第 23 号解題、神護寺聖教目録(京都府教育委員会)、査読無、2009、534-558
- ⑩ 藤本幸夫、日本に残る朝鮮仏教文献、『新アジア仏教史』第 10 巻所収(佼成出版社)、査読無、2010、138-141
- ⑪ 夏嵐・森賀一恵・磯部祐子、丁西林「压迫」の改編・翻訳・解説、『富山大学人文学部紀要』、査読無、第 52 号、2010、253-288  
<http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/kenkyu/k iyo52.mht>
- ⑫ 森賀一恵、毛詩音対照表、『富山大学人文学部紀要』、査読無、第 51 号、2009、65-113  
<http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/kenkyu/k iyo51.mht>
- ⑬ 夏嵐・森賀一恵・磯部祐子、丁西林「一只馬蜂」の改編と翻訳、『富山大学人文学部紀要』、査読無、第 50 号、2009、213-250

<http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/kenkyu/k iyo50.mht>

- ⑭ 森賀一恵、史焯『通鑑釋文』と胡三省『音注資治通鑑』、『富山大学人文学部紀要』、査読無、第 49 号、2008、113-139  
<http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/kenkyu/k iyo49.mht>

[学会発表] (計 15 件)

- ① 小助川貞次、地方国立大学における絶滅危惧研究種を巡る教養教育・専門教育の取組、第 16 回大学教育研究フォーラム、2010 年 3 月 18 日、京都大学
- ② 小助川貞次、東アジア学術交流史から見た漢籍訓読の問題、日・韓訓読シンポジウム、2009 年 11 月 21 日、麗澤大学
- ③ 小助川貞次、デジタル化時代に対応した漢文訓読研究の社会的共有システムの構築、国際ワークショップ「漢字情報と漢文訓読」、2009 年 8 月 22 日、北海道大学
- ④ 小助川貞次、(講演) 東アジア学術交流史としての漢文訓読、致理技術学院応用日語系学術講演会、2008 年 12 月 11 日、致理技術学院応用日語系(台湾・台北)
- ⑤ 小助川貞次、(講演) 東アジア学術交流史としての漢文訓読、2008 国際学術会議“Globalization and Asia”、2008 年 9 月 5 日、明知大学(韓国・ソウル)
- ⑥ 小助川貞次、訓点資料として見た敦煌本尚書の諸相、第 98 回訓点語学会、2008 年 5 月 25 日、京大会館
- ⑦ 小助川貞次、敦煌加点本を巡る研究課題、第 97 回訓点語学会、2007 年 10 月 14 日、東京大学山上会館
- ⑧ 小助川貞次、漢字文化圏における中国語と日本語の訓読加点の様相、国際シンポジウム「日本漢文の黎明と発達」、2007 年 9 月 9 日、二松学舎大学
- ⑨ 小助川貞次、日本語訓点資料における破音の意義、韓日国際ワークショップ「古代韓日の言語と文字」、2007 年 7 月 4 日、ソウル大学校奎章閣(韓国・ソウル)
- ⑩ 石塚晴通・小助川貞次、『敦煌点本書目』の構想、第 101 回訓点語学会、2009 年 10 月 18 日、東京大学
- ⑪ 石塚晴通、漢字情報と漢文訓読(基調報告)、国際ワークショップ「漢字情報と漢文訓読」、2009 年 8 月 22 日、北海道大学
- ⑫ 石塚晴通、東アジアの漢字字体と文献の性格、国際シンポジウム「古代文字資料から見る東アジアの文化交流と疎通」、2009 年 6 月 10 日、国立古宮博物館(韓国・ソウル)
- ⑬ 石塚晴通、「破音」の概念、第 98 回訓点語学会、2008 年 5 月 25 日、京大会館
- ⑭ 藤本幸夫、日本現存朝鮮本とその研究、BK21 海外碩学招請特講、2010 年 2 月 20 日、東国大学(韓国・ソウル)

⑮藤本幸夫、朝鮮出版文化と日本、公開ワークショップ「朝鮮文化と日本—数学・書籍・美術—一つの事例から」、2009年4月26日、仙台市博物館

林立萍 (LIN LI-PING)  
台湾大学・日本語文学学系・副教授

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小助川 貞次 (KOSUKEGAWA TEIJI)  
富山大学・人文学部・教授  
研究者番号：20201486

### (2) 研究分担者

石塚 晴通 (ISIZUKA HARUMICHI)  
北海道大学・名誉教授  
研究者番号：10002289  
藤本 幸夫 (FUJIMOTO YUKIO)  
麗澤大学大学院・言語教育研究科・教授  
研究者番号：70093458  
森賀 一恵 (MORIGA KAZUE)  
富山大学・人文学部・教授  
研究者番号：60243094

### (3) 研究者協力者

(日本)

池田証寿 (IKEDA SHOJU)  
北海道大学大学院・文学研究科・教授  
研究者番号：20176093  
渡辺さゆり (WATANABE SAYURI)  
札幌大学・文化学部・准教授  
研究者番号：10382459  
高田智和 (TAKADA TOMOKAZU)  
国立国語研究所・理論構造研究系・准教授  
研究者番号：90415612

(韓国)

呉 美寧 (OH MI-YOUNG)  
崇実大学校・人文大学・副教授  
朴 鎮浩 (PARK JIN-HO)  
ソウル大学校・人文大学・助教授

(イギリス)

フランセス・ウッド (Frances Wood)  
大英博物館・中国部・司書  
グラハム・ハット氏 (Graham Hutt)  
大英博物館・中国部・司書  
ヘイミッシュ・トッド (Hamish Todd)  
大英図書館・日本部・司書  
大塚靖代 (OHTSUKA YASUYO)  
大英図書館・日本部・司書  
松岡久美子 (MATSUOKA KUMIKO)  
大英図書館・管理部・シニアコンサバター

(フランス)

ナタリー モネ (Nathalie Monnet)  
フランス国立図書館・中国部・司書

(ベトナム)

グエン・テイ・オワイン (NGUYEN THI OANH)  
ベトナム社会科学院漢喃研究所・研究員  
(台湾)